編集後記

遅くなりましたが，第28巻1号をお届けします。会員の皆様の中には，先の東日本の震災にあわれた方がおられるかと存じます。心よりお見舞い申し上げます。

さて，巻頭言にはタイのマヒドン大学のNacapricha 博士にご寄稿いただきました。Schlieren効果はFIAの敵か味方かという興味あるタイトルの寄稿文です。Schlieren効果と聞くと，私にはイオン交換膜による電気透析の際に，膜の界面に発生する溶液の濃度分極の様子を，このSchlieren効果を利用して観測している論文を思い出します。寄稿文にありますように，濃度の濃い溶液と薄い溶液が混じり合うときに屈折率の揺らぎのために，しばしば吸光光度測定の際に，元来無色にもかかわらず吸光度信号に大きな影響をもたらすことは皆さんにもご経験のことかと存じます。同博士は，この効果をうまく利用してソフトドリンク中のスクロールの分析に応用できる，すなわち味方につけることができることを述べておられます。逆転の発想というものは，いろいろなところにありそうですね。国内からの巻頭言として，熊本大学の戸田敬教授に「フロー分析の多様性と結集性」というタイトルでご寄稿いただきました。流れを利用する分析法にいろいろなサイエンスや技術を結集させて，さらに新しい潮流を創り出そうという気概のこもったメッセージではないかと存じます。

最近は，国内外の国際会議のために本誌の編集委員会を開催できず，もっぱら書面会議になっていることもあって，記事を十分に集められず，今回は学術研究の論文5報のみでした。レビューや解説記事あるいはパーソナルレビューなども掲載していきたいと思っております。

トピックス欄には，トッピク担当幹事の樋口博士じきじきにより非接触型電気伝導度検出器の流れ分析への応用について紹介していただきました。また，私どもの研究室の学生さんにもマイクロチップを用いる蛍光イムノアッセイに小型のフォトダイオードを利用した分析法について紹介してもらいました。

報告欄はお楽しみいただけましたでしょうか。徳島大学の竹内先生には，本年5月に京都で開催されましたICAS2011におけるフローのシンポジウムに参加されたときの寄稿文をいただきました。ルチカ教授やダスブプタ教授など外国からの参加者が若干名キャンセルになりましたが，3日間に及ぶ講演の様子が紹介されています。また，本年7月にポーランドのクラクフで開催されました第17回ICFIAの寄稿文を山形大学の水口先生にご執筆いただきました。参加した私も水口先生の寄稿文を読み返すと美しくも，楽しかったクラクフの街を思い出しました。クリスチャン教授によるこの会議の寄稿文は，特に講演の内容もきっちり書かれていて，タランタ誌投稿の論文の予備査読をされている感があります。次回の18回ICFIAは2013年にポルトガルのRangel教授によって開催されることになっています。さらに，19回は，名古屋に続いて九州の方で開催する方向で調整が行われています。富山大学の加賀谷先生にはオーストラリアのメルボルン大学のKolev教授のもとに留学されたときの滞在記をご寄稿いただきました。楽しいオーストラリアでの生活の様子を垣間見ることができます。JAFIAの会員にご入会いただき，本会でのご活躍を期待しております。

国内の学会情報は，徳島大学の田中秀治先生にお願いしました。また，FIA Bibliographyは神奈川工科大学の飯田泰広先生にお願いしています。多くの論文を集めていただき，お礼申し上げます。

今後ともこの会誌が本会員の皆様方の情報交換の場になることを希望しております。ご寄稿をお待ちしております。

JFIA編集委員長　今任稔彦